



7/15 7/16 7/21

Alan GILBERT

Principal Guest Conductor

アラン・ギルバート
首席客演指揮者

© 堀田力丸

2018年4月に都響首席客演指揮者へ就任、7月に就任披露公演を迎えた。2019年9月にNDRエルブフィル（北ドイツ放送響）首席指揮者へ就任予定。ロイヤル・ストックホルム・フィル桂冠指揮者、ジュリアード音楽院指揮・オーケストラ科ディレクター。

2017年まで8シーズンにわたってニューヨーク・フィル音楽監督を務め、芸術性を広げる活動が高く評価された。ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、シュターツカペレ・ドレスデン、パリ管、クリーヴランド管、ボストン響などへ定期的に客演。オペラではメトロポリタン歌劇場、チューリヒ歌劇場、スウェーデン王立歌劇場、サンタフェ・オペラなどへ登場した。メトロポリタン歌劇場とのDVD『ドクター・アトミック』（Sony Classical）、ルネ・フレミングとのCD『ボエム』（Decca）でグラミー賞を獲得。

都響とは2011年7月に初共演、2016年1月・7月、2017年4月と共演を重ねて大きな喝采を浴び、首席客演指揮者就任が実現した。

Alan Gilbert is Principal Guest Conductor of TMSO, Conductor Laureate of Royal Stockholm Philharmonic, and Director of Conducting and Orchestral Studies at Juilliard School. He will be inaugurated as Principal Conductor of NDR Elbphilharmonie Orchester in September 2019. Gilbert was Music Director of New York Philharmonic between 2009 and 2017. He makes regular guest appearances with orchestras including Berliner Philharmoniker, Royal Concertgebouw Orchestra, Sächsische Staatskapelle Dresden, Orchestre de Paris, Cleveland Orchestra, and Boston Symphony. He has appeared at Metropolitan Opera, Oper Zürich, and Royal Swedish Opera, among others.

【アラン・ギルバート首席客演指揮者就任披露公演】

都響スペシャル

TMSO Specials "Alan Gilbert's Inaugural Concert as Principal Guest Conductor"

TMSO

サントリーホール

2018年7月15日(日) 14:00開演

Sun. 15. July 2018, 14:00 at Suntory Hall

2018年7月16日(月・祝) 14:00開演

Mon. 16. July 2018, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

シューベルト：交響曲第2番 変ロ長調 D125 (28分)

Schubert: Symphony No.2 in B-Flat major, D125

- I Largo - Allegro vivace
- II Andante
- III Menuetto: Allegro vivace
- IV Presto vivace

休憩 / Intermission (20分)

マーラー：交響曲第1番 二長調《巨人》 (55分)

(クレーピク新校訂全集版／2014年)

Mahler: Symphony No.1 in D major, "Titan"

1. Teil

- I Langsam. Schleppend
- Im Anfang sehr gemächlich
- II Andante con moto
- III Kräftig bewegt. (Langsames Walzertempo)

2. Teil

- IV Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
- V Stürmisch bewegt

第1部

遅くひきずるように
～冒頭非常に穏やかに
アンダンテ・コン・モート
力強く動的に (遅いワルツのテンポで)

第2部

厳粛かつ荘重に、ひきずることなく
嵐のように動的に

※今回の演奏楽譜は当初 Universal 社ウェブサイトを参照し (1893年ハンブルク稿／「花の章」付き) と発表しましたが、スコアの表記に従って (クレーピク新校訂全集版／2014年) と呼称します。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い | 演奏中は携帯電話の電源をお切りください。またアラーム付き時計や補聴器の音が鳴らないようご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

7/15・16 Special

5

シューベルト： 交響曲第2番 変ロ長調 D125

フランツ・シューベルト (1797~1828) が17歳から18歳の時期に作られた作品。当時の彼は、少年時代から在籍していた寄宿制神学校 (コンヴィクト) をやめ、教師をしていた父親の下に帰るといった転換期の中にあっただ。さらにこの間には、《糸を紡ぐグレートヒェン》《魔王》《野ばら》といった歌曲が幾つも誕生している。彼がいよいよ本格的に音楽活動を開始した、まさにそのスタートにあたる時期である。

そのような状況の中で生まれた交響曲第2番は、件の寄宿制神学校の校長に献呈されている。シューベルトの交響曲第1番 (1813年完成) 自体、寄宿制神学校のオーケストラに私的初演を行ってもらったという説 (確たる記録はなし) が一般的だ。ただし交響曲第2番については彼が学校をやめた後であるため、実際に私的初演が行われたか否かについて詳細は分からないものの、献呈先を見るに、母校のオーケストラによる私的初演が念頭に置かれていたのは間違いない。

なお寄宿制学校のオーケストラといっても、軽く見てはいけない。生徒を中心としたメンバーがかなりの腕前を具えていたことは、当交響曲を聴いてもよく分かる。そうでなくても当時のウィーンには、職業音楽家顔負けの腕前と音楽性を具えた音楽愛好家が数多存在しており、シューベルトが手がけた交響曲自体、そうした人々による演奏を考慮して書かれている。

第1楽章 (ラルゴ~アレグロ・ヴィヴァーチェ) は、モーツァルトの交響曲第39番の冒頭を彷彿させる輝かしい序奏に続き、ソナタ形式に基づく主部が始まる。この主部、親しみやすい快活な旋律に比して、中身は意外なまでに複雑だ。ベートーヴェンの《プロメテウスの創造物》序曲のごとくヴァイオリンが目まぐるしく動くだけでなく、それに合わせてヴィオラと低弦がリズムの掛け合いを見せたり、木管楽器が短い音型をかぶせたりときわめて情報量が多く、演奏者の技量が問われる。小節数が614にもものぼるため、楽章全体をだれずに聴かせる音楽性も必要だ。

第2楽章 (アンダンテ) は、ベートーヴェンが交響曲第3番《英雄》の第4楽章でも採用した変奏曲。とはいっても、ベートーヴェンのようなヒロイックな音楽ではなく、歌曲を思わせる主題をもとに5つの変奏が穏やかかつ儚く生まれては消えてゆく。

第3楽章 (メヌエット/アレグロ・ヴィヴァーチェ) は「メヌエット」と記載されているが、速度指定はかなり速い。メヌエットにしては珍しく、短調で書かれている点も独特だ。

第4楽章 (プレスト・ヴィヴァーチェ) も第1楽章と同様ソナタ形式に基づき、膨大な小節数 (727) となっている。「ヤンタタ」という短いギャロップ風リズムが1小節としてカウントされているためだが、シューベルト独自のミニマルなリズムの集積、最終的な解決の出口を探そうとして探しあぐねる姿勢が、愉悦の楽想の中に見え隠れしている。

(小宮正安)

作曲年代：1814年12月10日～1815年3月24日

公開初演：1877年10月20日 ロンドン

アウグスト・マンス指揮 クリスタル・バレス管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、
ティンパニ、弦楽5部

マーラー：

交響曲第1番 二長調《巨人》(クービツク新校訂全集版/2014年)

グスタフ・マーラー (1860～1911) の交響曲第1番は初期の作ながら彼の交響曲中特に人気も演奏頻度も高い。通常演奏されるのは決定稿だが、この作品はそこに至るまで紆余曲折があり、本日は決定稿以前の稿に基づく新校訂版 (2014年) で演奏される。

この作品の初稿の完成は1888年3月29日だが、構想は1884年頃に遡る。構想から完成に至る時期のマーラーは指揮者として各地の劇場のポストを転々としていた。若き彼の指揮の才腕は広く認められていたが、ユダヤ人という出自や自己主張の強い性格から嫌がらせや劇場当局との衝突が絶えず、ひとつのポストに留まることができなかったのである。初稿の完成時にはライプツィヒ市立劇場次席指揮者の地位にあったが、ここでも首席楽長アルトゥール・ニキシュ (1855～1922) との確執やこの交響曲の創作のために職務を怠ったことで、作品完成の約2ヵ月後に辞職に追い込まれている。

1888年10月ブダペスト王立歌劇場音楽監督の地位を得たマーラーは、翌1889年の11月20日ブダペストでこの初稿を自らの指揮で初演する。全体は5楽章からなっていたが、交響曲ではなく「2部からなる交響詩」と銘打たれた。ただ交響詩といっても標題は付されていなかった。

1891年マーラーはブダペストを辞し、ハンブルク市立劇場の第一指揮者に就任したが、1893年になってこの作品の改訂作業に乗り出す。改訂は大々的で、特に終楽章は構成上の大きな変更がなされた。この改訂稿の初演は同年10月27日ハンブルクにてマーラーの指揮で行われたが、その際全体の曲題は初稿初演の時と違う「交響曲形式による音詩《巨人》」とされ、全体を2部に分けた各部分に以下のような題が付けられた。

第1部 青春の日々より～花の、果実の、そして茨の絵

第1楽章 春、そして終わりなし

第2楽章 花の章

第3楽章 帆をいっぱい孕ませて (スケルツォ)

第2部 人間喜劇

第4楽章 難破 (カロ風の葬送行進曲)

第5楽章 地獄から

曲題の“巨人”や各部・楽章の題はジャン・パウル (1763~1825) の小説から採られた一方、“花の章”はマーラーが1884年にドイツの詩人兼小説家ヨーゼフ・ヴィクトル・フォン・シェッフェル (1826~86) の叙事詩「ゼッキンゲンのラッパ吹き」の付随音楽として書いた音楽であり、第4楽章にはフランスの版画家ジャック・カロ (1592~1635) の風刺画への言及もあるなど、様々な文学や絵画との関連がこの改訂稿の題から窺える。

しかしこれらの題はあとから当てはめたと考えたほうがよいようだ。もともと初稿からマーラーがこの作品で描きたかったのは英雄的な若者の苦闘や希望で、それに相応しい題を交響詩らしくこの段階で付加したと思われる。そうした若者像は指揮者として苦闘していた彼自身に重なるもので、さらにそこに自らの失恋や恋の悩みが反映されていることは、歌手ヨハンナ・リヒター (1858~1943/生没年は異説あり) に対する自身の失恋に基づく歌曲集《さすらう若人の歌》や、故郷イグラウでの恋愛体験と関わる歌曲《ハンスとグレーテ》などが曲中に引用されていることに示唆されている。

さらに1894年6月3日ヴァイマルでこの作品はやはりマーラー自身の指揮で再演されるが、この時またも大きな改訂の手が加えられた。彼が当時のヴァイマルの楽長リヒルト・シュトラウス (1864~1949) 宛の手紙で記しているところによれば、この改訂によって「全体に輪郭がはっきりし透明度が増した」ものとなった。

しかし改訂はこれで終わらない。マーラーはさらに作品に手を加えていき、最終的に《巨人》という題を取り払ったばかりか、当初の第2楽章「花の章」を削除、1896年3月16日ベルリンで4楽章の“交響曲”として初演した。こうして一般的に演奏されている決定稿としての交響曲第1番が出来上がったのである（その後も細部の手直しを加えられている）。

本日取り上げられるラインホルト・クービクによる新校訂版 (2014年5月トーマス・ヘンゲルブロック指揮NDRエルプフィル [北ドイツ放送響] により初演) は“1893年ハンブルク稿”という触れ込みのようだが、スコア (貸譜) にはそのような表記は見られず、実際前述の1893年10月に初演された稿 (一般にハンブルク稿といわれてきたもの。ここでは仮にハンブルク第1稿としておく) でなく、その後の改訂が取り入れられている (ただ校訂報告やスコアのコメントがないので詳細は不明)。

いわゆるハンブルク第1稿と当版を比べると、例えば編成が3管から4管に拡大され、ホルンも4本から7本に増やされており、曲題は「交響曲形式の2部の音詩《巨人》」となっているものの、各部・各楽章の題は (「花の章」の題も含め) 削除されている。

第1楽章冒頭をみても、ハンブルク第1稿では弦のフラジオレットの指示はないが、当版ではのちの決定稿同様にその指示が入っている。また9小節目に現れる狩の

音型は、ハンブルク第1稿では舞台上のホルン、当版では舞台裏のホルン、決定稿ではクラリネットという具合に改訂の度に変更されている。第4楽章（決定稿では第3楽章）の冒頭も、ハンブルク第1稿は独奏チェロと独奏コントラバスのユニゾンだったのだが、当版は独奏コントラバスのみとなり、この形は決定稿に受け継がれる。

このように楽器法をはじめ強弱法、細部の音型など、当版はハンブルク第1稿とも決定稿とも違う点が無数にある。ただ全体的には決定稿にかなり近づいたものとなっており、上述のヴァイマルでの演奏の際の修正などが反映されていると思われる。

第1部

第1楽章 遅くひきずるように～冒頭非常に穏やかに 自然の目覚めを表す序奏の後、自由なソナタ形式による生き生きした主部となるが、その軽快な第1主題は歌曲集《さすらう若人の歌》の第2曲「朝の野辺を歩けば」の旋律による。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 当初“花の章”と銘打たれていた楽章で、弦のトレモロ上で奏されるトランペットの主題に始まる伸びやかな叙情楽章。決定稿では削除された。

第3楽章 力強く動的に（遅いワルツのテンポで） レントラー風のスケルツォ楽章。

第2部

第4楽章 厳粛かつ荘重に、ひきずることなく 独奏コントラバスの導く俗謡のカノンで開始されるが、これは動物の葬列を描いたカロの戯画にヒントを得ており、葬送行進曲の中に陳腐な楽想が挟まれる点にアイロニーが感じられる。中間部は一転、《さすらう若人の歌》第4曲「2つの青い瞳」の引用が憧憬の気分を生み出す。

第5楽章 嵐のように動的に 青春の苦闘と憧憬とが交錯しながら起伏ある劇的な展開が繰り広げられ、最後に輝かしい勝利に至る。コーダでのホルンの凱歌（決定稿では楽譜に立奏を求める注記があるが、当版ではまだベルアップのみの指示に留まっている）には決定稿にはないティンパニの力強いリズムが伴っているのが印象的だ。

（寺西基之）

作曲年代：初稿／1884～88年 改訂／1893～96年

初演：初稿 1889年11月20日 ブダペスト
改訂稿 1893年10月27日 ハンブルク
再改訂稿 1894年6月3日 ヴァイマル
決定稿 1896年3月16日 ベルリン
いずれも作曲者指揮

楽器編成：フルート4（第2～4はピッコロ持替）、オーボエ4（第3はイングリッシュホルン持替）、クラリネット3（第3は小クラリネット持替）、小クラリネット（バスクラリネット持替）、ファゴット3（第3はコントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ハープ2、弦楽5部



第859回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.859 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2018年7月21日(土) 14:00開演

Sat. 21. July 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor
コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

【バーンスタイン生誕100年記念、ガーシュウィン生誕120年記念】

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 op.95 B.178

《新世界より》(40分)

Dvořák: Symphony No.9 in E minor, op.95 B.178, "From the New World"

- I Adagio - Allegro molto
- II Largo
- III Scherzo: Molto vivace
- IV Allegro con fuoco

休憩 / Intermission (20分)

バーンスタイン：『ウエスト・サイド・ストーリー』より

「シンフォニック・ダンス」 (22分)

Bernstein: Symphonic Dances from "West Side Story"

プロローグ／サムウェア／スケルツォ／マンボ／チャチャ／出会いの場面／
クール〜フーガ／ランブル（乱闘）／フィナーレ

Prologue / Somewhere / Scherzo / Mambo / Cha-Cha / Meeting Scene /
Cool ~ Fugue / Rumble / Finale

ガーシュウィン：パリのアメリカ人 (18分)

Gershwin: An American in Paris

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)



独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待) 協賛企業・団体はP.43、募集はP.46をご覧ください。



お願い

演奏中は携帯電話の電源をお切りください。またアラーム付き時計や補聴器の音が鳴らないようご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

本日の曲目から感じられるテーマは「異文化との出会い」。ボヘミアの作曲家がアメリカ文化に触発されて書いた《新世界より》、ジャズや南米の音楽を採り入れた《ウエスト・サイド・ストーリー》、パリの旅情が反映された《パリのアメリカ人》。ニューヨーク・フィルによって初演された3曲を、同フィルの音楽監督を務めたギルバートが指揮するこだわりのプログラムです。

(編集部)

ドヴォルザーク：

交響曲第9番 ホ短調 op.95 B.178 《新世界より》

アントニン・ドヴォルザーク (1841～1904) は 1892 年から 95 年にかけてニューヨークを本拠に活動した。すでに後期の円熟期に入り、ボヘミア (チェコ) の国民主義的な作曲家として高い名声を得ていた彼が、大西洋を超えてアメリカに移り住んだのは、ニューヨークのナショナル音楽院院長のポストが与えられたからだった。

音楽院を創設したジャネット・サーバー夫人 (1850～1946) から院長のポストの打診があったのは 1891 年のことで、最初はドヴォルザークはこれを断った。ボヘミアの国民的な音楽を求めて活動してきた愛国者ドヴォルザークにとって、自分が母国を離れて新大陸で活動するなど考えもできないことだったに違いない。しかし、サーバー夫人の再三にわたる懇請に、ドヴォルザークはついに契約書にサインする。相当に迷った末の決断だったが、1年に4ヵ月もの休暇が与えられることと、それまで務めていたプラハの音楽院の給料の実に約 25 倍という報酬がもらえるという破格の条件が決め手となった。こうして彼は 1892 年 9 月、12 日間の長い旅程を経て、新大陸に到着したのだった。

新天地で暖かい歓迎を受けたドヴォルザークは、当初ニューヨークの生活が気に入りに、また作曲の授業やオーケストラの指導といった教授活動はもちろんのこと、院長としての雑務も忠実に果たすなど、熱意をもって職務に取り組んでいった。また、黒人霊歌やインディアンの音楽などの民俗音楽や、アメリカ文学など、アメリカの文化に刺激を多く受けた。

そうした中、新天地での初めての大作として作曲に着手したのが交響曲第9番だった。これは 1893 年初めから書き始められ、同年5月に完成をみている。アメリカの詩人ロングフェローの叙事詩「ハイアワサの歌」に靈感を得たり、いくつかの楽想がアメリカの民俗音楽や黒人霊歌と通じるものであるとされるなど、この作品にはアメリカで受けた影響がさまざまに形で盛り込まれていることが指摘されている。

しかしだからといってこの作品をアメリカ的ということはできないだろう。ドヴォ

ルザーク自身この交響曲について、わずかにアメリカ風であり、作曲にあたってインディアンの歌も含むアメリカのモチーフを集めたことなどを述べる一方で、結局はチェコの音楽であると記しているが、そのとおり、この作品はアメリカの民俗音楽の要素や新大陸の文化の影響を示しつつも、一方でそうした要素もボヘミアの音楽の特徴に重ね合わされて、まさにチェコの国民作曲家ドヴォルザークならではの民族色豊かなものに仕上げられている。

この作品を書いていた頃、すでにドヴォルザークは言語も生活習慣もまったく違う異国の生活環境に違和感を覚え始め、母国を懐かしく思うようになっていた。やがては強度のホームシックに繋がっていくことにもなるそうした郷土への思いは、この交響曲にはっきりと刻印されているといえよう。遠く離れているがゆえに一層強まる母国を愛する感情が、この作品には滲み出ているようだ。彼自身によって付けられた題も意味深長で、「新世界」ではなく「新世界より」としているところに、新大陸から発信する母国への便り、新世界から送る母国への思いといった彼の心情が示されていると思われる。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト どこか深刻な面持ちに始まり、突如激情を露わにする序奏は、この楽章の起伏の激しさを先取りしている。主部の第1主題（序奏において予示されている）はホルンが示す雄大なもので、これが全楽章を通じての循環主題となる。

第2楽章 ラルゴ イングリッシュホルンによる有名な主題を持つ叙情豊かな3部形式の緩徐楽章。ロングフェローの叙事詩「ハイアワサの歌」の森の葬式的情景に関わるものとされ、黒人霊歌などとの関連も指摘されているが、全体を支配するのはノスタルジックな情感である。

第3楽章 スケルツォ／モルト・ヴィヴァーチェ これもまたロングフェローの「ハイアワサの歌」の結婚の儀式でのインディアンの踊りに靈感を得たといわれるスケルツォだが、性格的には明らかにボヘミアの民俗舞曲を思わせる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 激しい情熱と郷愁感とが入り交じるソナタ形式のフィナーレ。前の3つの楽章の主題も回想しながら変化溢れる展開が繰り広げられる。コーダでも各楽章の主題が現れて盛り上がりを築き、最後は遙かな故郷を夢見るかのような、管楽器によるホ長調の長い和音のうちに余韻を残して閉じられる。

(寺西基之)

作曲年代：1893年

初演：1893年12月16日 ニューヨーク

アントン・ザイドル指揮 ニューヨーク・フィル

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽5部

バーンスタイン：

『ウエスト・サイド・ストーリー』より「シンフォニック・ダンス」

『ウエスト・サイド・ストーリー』といえばミュージカル史でも屈指の傑作。その輝きは1957年の初演から今に至るまで褪せることがない。筋書きは『ロミオとジュリエット』の現代版だ。舞台となるニューヨークの社会背景をおりませながら、イタリアやアイルランドやポーランドといった欧州移民系の血を引く白色系アメリカ人と、プエルトリコ系アメリカ人という2つの不良少年グループ（順に“ジェッツ”と“シャークス”）の抗争、それに翻弄される主人公トニーとマリアの悲恋が扱われていく。

「シンフォニック・ダンス」のスコアは作曲者レナード・バーンスタイン（1918～90）監修のもと、シド・ラミン（1919～）とアーウィン・コスタル（1911～94）によって編まれた。全編を貫く旋律美や、変拍子を変えたりリズムの冴えばかりでなく、細部に張り巡らされた動機群の緊密な関係性（そこからフーガまで繰り出される）にも聴くべきものが多い。つまりは“作曲家バーンスタイン”の面目躍如たるオーケストラ・ピース。原作とは音楽の登場順序が部分的に入れ替わっているが、筋の流れをおおまかに追いながら、以下の曲が切れ目なく続く構成である。

ジェッツとシャークスが小競り合いを演じるところに警官が闖入する「プロローグ」。安息の地への憧れを歌う「サムウェア」は最終場面でも重要な役割を果たす。続く「スケルツォ」は少年たちが手をとりあって踊る未来を夢に見る場面。

トニーとマリアが出会う体育館でのダンス・シーンで流れるのが、おなじみのかけ声も耳に嬉しい「マンボ」だ。踊りの最中で恋に落ちた2人が軽快にステップを踏むのが「チャチャ」。初めて会話を交わす彼らのシルエットに優しくも静謐な響きが寄り添う「出会いの場面」。シャークスと決闘の段取りを交わすことになったジェッツの面々が、その昂る気持ちを冷まそうと踊りに興ずる「クール～フーガ」は、ジャズの香りを濃厚に漂わせながら次第にテンションを高める。

劇の山場をなす「ランブル（乱闘）」で、トニーは仲裁に入りながらも思わぬはずみでマリアの兄を刺し殺してしまい、再会を果たしたマリアの前で報復の銃弾が彼の命まで奪う。「フィナーレ」では彼の亡骸を囲む少年少女の姿が、愛惜と悔悟の念にはのかな希望が交錯する形で描かれていく。

（木幡一誠）

作曲年代：1955～57年に作曲された舞台作品から1960年に編曲

初演：1961年2月13日 ニューヨーク
ルーカス・フォス指揮 ニューヨーク・フィル

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ボンゴ、タンブリン、ティンパレス、トムトム、小太鼓、コンガ、テナードラム、大太鼓、音程のあるドラム、ドラムセット、トライアングル、シンバル、フィンガーシンバル、カウベル、タムタム、ヴィブラフォン、グロッケンシュビール、チャイム、ウッドブロック、ギロ、マラカス、シロフォン、警官の笛、ハーブ、ピアノ（チェレスタ持替）、弦楽5部

ガーシュウィン： パリのアメリカ人

1928年の3月、ジョージ・ガーシュウィン（1898～1937）は兄アイラ（1896～1983）や友人たちと連れ立ってパリの地に降り立った。ニューヨーク・フィルハーモニックから委嘱された管弦楽曲を、かねてから頭に抱く“パリ風の楽想”で書き上げようと目論んでいたガーシュウィンにとっては、物見遊山だけが目的の旅では毛頭ない。滞在中の8月には2台ピアノ用の草稿が完成し、帰国後の11月18日に《パリのアメリカ人》のスコアが脱稿に至る。パリ土産として鞆に入れた“タクシーの警笛”4本も首尾よく初演で使われ、曲に本場（！）の空気感を添えることとなった。

ガーシュウィン自身の説明によると、これは「パリを訪れたアメリカ人が街をそぞろ歩き、ざわめきに耳を傾け、異国情緒に心を奪われる」さまを描いた交響詩である。冒頭から耳にとまる“散策の動機”と共に軽妙なタッチで曲は進んでいくが、やがてトランペットのソロが“ブルース”を奏でる。「我らが同胞はカフェで一杯やるうち、思いがけずホームシックにかかったようです」というのも作曲者の弁。にぎやかなチャールストンのリズムに乗って主人公は再び散策に励み、最後は都会の喧噪に身を委ねるようなコーダによって閉じられる。

（木幡一誠）

作曲年代：1928年

初演：1928年12月13日 ニューヨーク

ウォルター・ダムロツシュ指揮 ニューヨーク・フィル

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、サクソフォン3、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュビール、トムトム、タクシーの警笛、ワイヤブラシ、シロフォン、ウッドブロック、チェレスタ、弦楽5部